狂童女の戀

岡本かの子

青空文庫

――きちがひの女の兒に惚れられた話をしませう。

と詩人西原北春氏はこの詩人得意の「水花踊」などまだ始まらぬまだほんのほの／〃＼と酒の醉ひがまはりかけたばかりのところで――あれが始まるころはまつたく泥醉狀態になつた西原氏なので――話し始めた。

支那の李太白らが醉つて名詩を作つたといふのはどれほどの醉ひに達したときか知りませんが、わが國の大詩人西原北春氏にありては、今北春氏が

――きちがひに惚れられた話をしませう。

と厚い童男のやうな唇にいくらか微笑をふくんでいひ出した程度の醉ひの狀態が一番、この大詩人の詩的面目の躍如たる表現に適してゐることを私には斷言出來ます。――さきは九歲のこどもですよ。

――會社の重役のお嬢さんですよ。

なんと驚いたでせう、といふ氣持ちを、すこしふら〳〵する手つきに出して西原氏はわれわれにこの話へのより多くの注意を促した。

――僕が目黒の競馬場の奥に棲んでゐたとき、あの邊は開けたばかりだから坂が非常に多かつた。

西原氏はそこでまた、一つ杯を取り上げ口へ運びながら私を上目で視て

――それ、あなたが、僕のあの家へ始めて尋ねて來たでせう、そして、僕んところへ持つて來るメロンを抱きながらあなたは坂を下つて來た。夕陽があまり綺麗だから、あなたは見惚れながらあの坂を降りて來た。すると、中途で石に下駄を奪られ、つまづく拍子にあなたの手に持つてゐたメロンが坂からころ〳〵ところげ落ちちまつた。あの下が谷でメロンがたうとう見つからなかつた、あの坂ね、あの坂のところで僕はそのお嬢さんに見染められたんですよ。

私はその坂を覺えてゐる。

頂上の左右に二三の大邸宅を控へてゐる。雜木の小丘を截つて附けた坂としてはわたりが長く隨つて茅萱野草に掩はれた一方の崖下は深くて長かつた。西原氏がメロンの落ちた谷といつたのはその崖下だつた。左右の荒地、嶮岨に似ず、坂の表面はきめのこまかい赤土で小石が、いくらか散らばつただけの柔和な傾斜面だつた。

ころがせ、ころがせ、びいる樽とめて、とまらぬものならば赤い夕陽の、だら〳〵坂をころがせ、ころがせ、びいる樽。

西原氏は、嫌味のないさつぱりした調子で、あの坂でつくつた自作の童謠を口ずさみ、しみじみと愉快氣に童男型でありながらまた大人風をも備へた大兵の體を振つた。

――この謠をですね、醉つて私は唄ひながら、あの坂を降りて東京市内から自宅の方へ歸つたものですよ。さうですよ。朝か、晝ごろ出れば大がい夕方醉つて私は市内から歸るのでし

たよ。

その西原氏を狂童女がどこから眺めて送迎してゐたものか、西原氏の市中へ出る途を擁してゐて、或朝、まだ醉つてゐない西原氏に一人の品の宜い初老位な奥様風の女性が、坂の上の大邸宅の一つから出て來て立ち向つた。

――何とも御迷惑なことゝ、重々御察しいたしますが……。

と彼女は、幾度も幾度も、考へ拔いた上のことらしく、語調に惡びれた様子もなく、すらすらかういつて、西原氏に狂童女に一度會つて呉れるよう、ひたすら頼み入るのだつた。

――氣の違つたまゝで、たゞ〳〵あなたをお慕ひ申すのがいぢらしくて、失禮とも何とも申し上げ兼ねますが……。

こどもの戀心を汲み取つて述べる母親の口からは、自然とかういつた舊套な抒情詩が滑り出るのだつた。だがこの場合、さういふ口調が却つて舊套を脫して、こどもの氣持ちも母親の氣持ちも、一しよに鮮かに西原氏のこゝろには訴へられたのだ。

てれてはにかんだ詩人は、肉體的にもむづ痒いものが、太い頸を目がけて、背中から匍ひ上つて來るやうなのを、どうしようもなかつた。脫いだ帽子で頸のまはりを磨りまはしながら、

――連れていらつしやい、僕の家でお會ひします。さよなら。

詩人はぽくんと一つ叩頭をして、逃げ出す氣持ちで坂を降りかけたが、何だか物足りないものを殘した氣がしたので、思はず振り向いた。

――お母さん、そのお嬢さんはおいくつです。

母親は、こゝに至つて穴にも入りたく、身の置きどころもない様子をして、手をむやみに磨り合はせてゐたが、顔はぐつと、斜にうつ向けたまゝ、答へたくないものを答へる調子でいつた。

――あの、それが、九つなのでございまして……。

これを聞くと西原氏は、おう！　と虎のやうに叫んで、坂下目がけて驅け出した。口惜しいやうな、悲しいやうな、剽きんなやうな、何とも名状しがたい氣持ちがあとから押すやうで、西原氏は、毬のやうな身體のはずみを、坂から三四丁先きの我家まで一氣に飛ばした。そして家に有合せた酒をむやみに呑んで、誰にとも知れない恥かしいわく〳〵した氣持ちで、呑んで呑み拔いた酒に醉ひつぶれて仕舞つた。

あくる日、西原氏は母親に連れて來られた少女に書齋で會つた。聞いた歳よりはずつと大きく見える少女で、富家の子で榮養も好いのであらうが狂女の病的に發達しませた體軀の工合ひが十四、五歳位にも見える。明治初期の美人畫に見るやうな瓜實顔に目鼻立ちが派手についてゐて、凄い美人になりさうな少女だつた。一寸見ると、何處といつてきちがひじみた處も無かつたが、よく見ると、尖つた顎の削げ方と、額が押し竦められたやうに迫つて、それに一文字に濃い兩眉がひとに不安の感じを與へる。

少女は一寸伸び上り、おとなしく西原氏と眞向きの椅子に腰をかけると、眼ばたきもせず、

しげしげと西原氏の顔を見惚れるのだつた。

西原氏はまた酔つたあくる日の朝の西原氏なので、昨夜のそわそわした気持ちも抜けてぽかんとした中に厳粛なものに対する一種の憧憬れを持つてゐるやうな気分であつた。それで始めは、この狂少女に対して、たゞ憐れみが先に立ちそれほど見度い顔ならたくさん見せてあげようといつた具合ひに、青年顔と少女顔と壮年顔に佛顔が交つた西原氏のこの日本にあまりたぐひない——恰度西原氏の詩才と同じ様な特色のある顔を濟して少女の方へ向け黙つて鼻で息をしてゐた。

四月の朝の光線が、窓から一ぱいさし込んで、デスクから床の上へ雪崩のやうに落ち散らばつてゐる西原氏の詩稿の書き屑を目眩しく見せた。座敷のさういふ白いものや少女の白い顔に庭樹の芽吹きが薄青く反射した。

西原氏の顔へ向けた少女の凝視があまり續くので、母親が口を切つた。

——英子、折かく先生にお目にかゝつたのですから、何かお話をなさい。

すると少女は舞臺の人形振りのやうにこつんと一つうなづいて、大人のやうに、ゆつくり話し出した。

——あの先生。先生はいつ、お嫁さんをお貰ひになるの。先生のお嫁さんになるには、こどもぢや、いけなくつて。あたし、先生のお嫁さんになりたいんだけれども。けれども、こどものお嫁さんつてないわね。こどものお嫁さん貰ふとお巡査さんに叱られるの？

西原氏は驚いた。こんな理路整然とした戀ごゝろの表現が氣狂ひの口から出るものなのか。もちろん少女のことなので、いふ言葉はあどけない。しかし、このあどけないものに、もつと大人の言葉を置き換へたら情緒を運ぶ順序においては、もうそれは少女のものではない。立派に成熟した一人前の男に對する口説き方だ。西原氏は怖ろしくなつて、少女を思ひ切つて睨み据ゑた。そして腹のなかでかういひ据ゑた——お前にさういはせるのは何者だ、どの魄だ。

母親は母親で、おろ〳〵してゐる。

——あ、そんなことだけはいくらなんでも、先生の前でいはない樣にと、あれほどいつて置きましたのに、やつぱり頭の狂つてゐるものに、何と申し聞けて置きましても仕方が御座いませんのですねえ。

そして、不躾をくり返し〳〵西原氏の前にあやまる母親はもういくらか涙聲にさへなつてゐる。それを傍耳に聞きながら西原氏はひるまず少女を見据ゑてゐたが、何も發見することは出來なかつた。そしてをかしなことには少女の顔は前に默つて西原氏を見惚れてゐたときも、これほど纏綿とした情緒を披瀝するときにも、筋一すぢ表現を換へない。磨き出されたやうな美人型の少女顔は、生きた動きのない人形のやうである。この少女の顔を睨んでゐた西原氏の瞳の方が、却つてこの無感覺な無表情に彈ね返され、しどろもどろになつて來た。

西原氏は、何となく落寞とした嘆きを感じ出した。そして少女の顔から眼を逸したが、こゝろは最後の慄へる探求を捨てなかつた。西原氏は硝子戸越しに庭を眺めさりげない樣子で例の

詩を微吟した。

ころがせ　ころがせ　びいる樽とめて、とまらぬものならば赤い夕陽の、だらだら坂を
ころがせ　ころがせ　びいる樽　（北原白秋氏作）

西原氏は、この童謡の微吟を聞いた狂少女の顔に、何か捉へ得る表情の變化が現はれはしないかとひそかに望んだ。だが、徒勞だつた。

少女は西原氏の詩の微吟に表情の微動さへ見せず、袂のなかを、しきりに掻き廻し始めたが、やがて何物か取り出して、西原氏の鼻先へ突き出した。

――これ先生に上げようと思つていつかから取つといたのよ。

それは干からびた柿のへただつた。それから少女はきやら〳〵笑ひ出し、まつたく氣狂ひの樣子を現し出した。母親はそれを見て

――ご覽のとほりです。

と遂々聲を立てゝ泣き出して仕舞つた。

西原氏は、そろ〳〵襲ひかゝつて來る醉ひのみだれを追ひ拂ふやうにしながら、そのはなしの最後をわれ〳〵にした。

――その少女はそれから間もなく死にました。

わたしはその少女を思ひ出す度に、なつかしいやうな、癪にさはるやうな、可哀相なやう

な、妙な氣持ちになつちまふのです。が、要するに、まあ、こんな話は酒でも呑んだ時でなければひとにははなし憎い話ですなあ。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集　第一巻」冬樹社
　　1974（昭和49）年9月15日初版第1刷発行
入力：網迫
校正：瀬戸さえ子
1999年2月6日公開
2013年10月1日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狂童女の戀

岡本かの子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/